みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Meditation practice of ksetra-pariśuddhi in Tibet

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野田, 俊蔵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003788

チベット所伝の浄土観想修法

——青木文教師将来資料 Nos. 103, 104, 107, 108, 109 についての管見——

小野田　俊蔵*

1

青木文教コレクションには数点のいわゆる浄土教文献が含まれている。これは青木文教師が浄土真宗と関係深かったことにも起因するのであろうが，その数点のいずれもが一般信者のための読誦用のものであることも，師の収集物全般の性格とも合わせて興味深い。強烈な印象を与えるタントラ仏教という性格付けに隠れてチベットの一般大衆の信仰の姿は忘れられがちだが，無量寿仏の極楽国土に来世をたくすこの浄土教信仰もチベットの一部の民衆の間では根強い信仰なのである。『無量寿経』に叙述された極楽国の様相を観想し，そこに往生を願うといういわゆる浄土教信仰はチベットでは大きく分けて二系統の流派として伝えられているが，当青木文教コレクションにはその両方に属する文献が含まれている。その二流の第一は，顕教的色彩の濃いゲールク (dge-lugs) 派に伝わるもので派祖ツォンカパ (Tsong-kha-pa Blo-bzang grags-pa'i dpal, 1357–1419) が著した "*bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam zhing mchog sgo 'byed* (極楽国への往生を得る為の願文『最上国開門』)" と題される誓願文[1] を始源とする系統である。当コレクション中の目録番号 **103** および **104** はこの書物から抄出された読誦用の略本である。さて，他の一方の流派は，ゲールク派以外の諸宗派，特にニンマ (rnying ma) 派やカーギュ (dka' brgyud) 派の間で主に伝承されているもので，ケートゥプ・ラーガアスヤ，別名カルマチャクメー(mKhas grub Rāga-asya, karma chag med) が著した "*rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (極楽浄土［に往生する為の］願文)" と題される誓願文[2] を始源とする系統である[3]。当コ

---

* 仏教大学文学部

1) [小野田　1979] [小野田　1981] を参照されたい。

2) 邦訳が存在する。[宗川　1931]

3) その他，サキャ (sa-skya) 派等にも無量寿仏や無量光仏を扱ったサーダナ類は多く瞑想の対象にはなったが，浄土教的要素は少なく，後世に与えた影響も大きくないように思える。

レクション中の **107** および **108** がこの書にあたり，また **109** はその注釈書である。ラーガアスヤについては不明な点が多く，その事蹟，著書などについてもまとまった記述が与えられている史書を筆者は知らない[4]。ただ彼は17世紀に活躍した人物であり，Sprul-sku Mi-'gyur rdo-rje と深い関係があったとされ，また数種の浄土教文献が彼の名のもとに伝えられている[5]ことを付言しておこう。

2

さて，**103** と **104** の二書がツォンカパ造の一書からの抄出であることにはすでにふれたが，それではそれらを実際に読誦しながら，どのような修法が行なわれていたのだろうか。抄出のもととなったツォンカパ造の『最上国開門』は，『無量寿経』にえがかれている極楽国の荘厳の様相を著者のツォンカパが観想し易い形に摘要しつつ編集しなおしたものといえる書物であるが，チャンキャ (lCang-skya ngag-dbang blo-bzang chos-ldan dpal-bzang-po, 1642–1714) は，それを一歩進めて "*Zhing mchog sgo 'byed kyi dmigs rim mdor bsdus* (『最上国開門』の観想次第要略)" と題する手引き書を著わし，儀式形態をともなった浄土観想法としてまとめあげている。この修法の手順はチャンキャの言葉によれば[6]次のようになる。

1. zhing mchog ston pa dang bcas pa'i yon tan yid la yang yang sems pa (教主[である無量寿仏] をはじめとする最上国の功徳を心にくりかえし思い起こす)
2. bde ba can du skye ba'i rgyur dge rtsa mang po sog pa (極楽に生まれる要因として善根を多く積む)
3. byang chub tu sems bskyed pa (菩提心を起こす)
4. de dag gis dge ba rnams bde ba can du skye ba'i rgyur bsngos (それらによる諸々の善を極楽に生まれる要因として廻向する)
5. der skye bar smon lam 'debs (そこに生まれようとする願をたてる)

これらの手順は言うまでもなく『無量寿経』中に説かれているもの[7]であるが，チャンキャはそれぞれの要所でツォンカパの『最上国開門』を抄出して修法としての形

4) [Khetsun 1978: 245–248] に「chags med ra-ga-a-sya」の項目があるが，具体的な記述にとぼしい。
5) Institute for Advanced Studies of World Religions (ISSWR) Tibetan Religious Works: PL 480/SFC Collections (Microfiche) 中の R-525, R-526, R-544, R-545, R-607 等参照。
6) TTP. Vol. 162, 141–3–5.
7) 浄全 p. 286, l. 24.

態をまとめ上げているのである。この抄出方法が前述の読誦用略本に合致する[8]ことは言うまでもない。すなわち，『無量寿経』に始源するこのような浄土観想法の修法形態がゲールク派の中で綿々と近年まで伝承されているのである。

3

チャンキャの手引き書のテキストは『影印北京版西蔵大蔵経』(TTP.) 続篇の西蔵撰述部「章嘉全書」に収録されている（大谷 No. 6225, TTP. Vol. 162, 141-1-3～142-4-2)。以下その試訳を掲げ，103 更に 104 を使った浄土観想修法の次第を概観してみたい。尚，以下に掲げる試訳とは，主として筆者の解釈を示すものであり，テキスト校合の結果を提示したものではない。又，括弧でくくった字句は筆者の補充訳語である。

【試　訳】

『最上国開門』の観想次第要略

無量光［如来］に頂礼する。次の様に『聖なる無量寿無量慧の心髄』[9]と称されるダラニに説かれている。

「ここから西の方向に極楽世界［がある。］そこには正等仏がお住いになっている。［その仏とは］無量寿如来［である。］その御名を称えるなら誰であってもそこに生まれるであろう。死の時に臨んだなら，比丘の僧伽を従えて［来仰される無量光仏］が見られ［るであろう。］そ［の国］には女子は存在しない。［従って］子宮に住するものも存在しない。諸宝の蓮華から大いなる神変［として］生じるであろう。諸々の食や衣類や薬や法衣，下衣，鉢など［必要なものを］心に思いうかべるやいなやそれらが瞬時に生じるであろう。十方にお住いになっている諸仏が極楽の讃歎を語っておられる。そのように仏は不可思議である。仏［の］法もまた不可思議である。聖者の僧伽は不可思議である。不可思議なるものを信じた者が成熟［して往生するの］もまた不可思議である。［不可思議ではあるがそのよう

8) 例えば，チャンキャの手引き書で "phul byung mdzad pas 'gro la mi zad dpal ster zhing/nas/ 'dir gshegs shig/ces..." (TTP. Vol. 162, 141-5-8) として援引されている部分は『最上国開門』(広本）では敬礼文につづく数偈 (TTP. Vol. 153, 67-2-6) と後半にある数偈 (TTP. Vol. 153, 70-5-3) が合成されたものであるが，これは『極楽願文』（略本）でもつらなった偈文となっている部分である。

9) 大谷 No. 363, *'phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs.*

に信ずることによって] 清浄国土に生まれるであろう。[10]」

と [説かれている]。また『無量寿経』には,

「極微の数にも等しい [程多くの] 世界を破壊し砕いて粉末にしたそ [の数] よりも [まだ] 多い諸世界を, 宝で満たして布施を施す者は, 無量光仏の御名と極楽の特別に尊い諸功徳を聞いて喜んで合掌する者のこの福徳の一部にもならないのである。そのようであるからかの [無量寿] 如来の功徳を聞いて満足と喜びを生じて, 最上の極楽世界に行かねばならない [という気持ち] の故に強い信心を生ずるのである。極楽世界の名を聞いた者のその福徳に [比すれば] すべてのそれら最上で厖大な国 [といえども] 一部にもたとえにもならないのである。勝者の勅言と智慧を有するもの, 彼らはそれよりも福徳が多くなる。その目的を得るために [は] 信が根本であって, その故に聞け [, そして] 二心を滅せよ。[11]」

と [説かれている。] また, 無量寿仏御自身の御口から,

「私は次のような本願をおこしたのだ。いかなる有情にせよ, 私の名を聞くならば, かならず私の国に来させたまえ, と。その私のすぐれた願は完成された[12]のであるから, 多くの世界から衆生がやってくる。彼らは私の国に集まってきて, 彼らは [その] 一回の転生 [を最後としてそれ] から退転することはない。[13]」

とお説きになっている [。その] ような長所利点を持っているその最上国に生まれる要因を完成させる点については『無量寿経』に,

「アーナンダよ, およそいかなる有情にせよ, かの如来 [に対し, その] 様相についてくりかえし思いをそそぎ, そして, 限りない多くの善根を植え, 菩提に心を起こして, かの世界に生まれたいと発願するならば, かの完全な正覚を得た尊敬されるべき者たる無量光如来は, 彼らの臨終の時が近づいたときに, 多くの比丘の僧伽にとりかこまれ, [面前に] 立つであろう。そうして, 彼らは無量光世尊を見て, きわめて浄い心になり, 死してかの極楽世界に生まれるのである。アーナンダよ, およそ, 善男子あるいは善女人であって『いかにして私は現在この世において, [かの] 無量光 [如来] にまみえることが出来るであろうか』と欲するものは, この上ない完全な正覚に対して心を起こし, 深いこころざしを持続させて, かの仏国に心をかけ, [そこに] 諸々の善根を起こしつつ廻向すべきである。また, アーナンダよ, およそ [有情たちが] かの如来に対してくりかえし思いを

10) TTP. Vol. 7, 305-5-5 ～ 306-1-1.
11) 浄全 p. 286, l. 9.
12) テキストには brjod とあるが, 浄全の rdzogs を採る。
13) 浄全 p. 292, l. 8.

そそいで，絶えず限りない善根を多く植え，かの仏国に心をかけるであろうならば，かの完全な正覚を得た尊敬されるべき者たる無量光如来と，色や形や高さや広さという点でも，比丘の僧伽［にとりかこまれている点］でも，まったく同様の仏の化身が，［彼らの］臨終の時に，面前に立つであろう。そうして，彼らは如来にまみえることによってきわめて浄い心にもとづくその三昧と無忘の憶念をもって，死して，その仏国に生まれるであろう。[14]」

と［説かれているように］教主［である無量寿仏］をはじめとする最上国の功徳を心にくりかえし思い起こし，極楽に生まれる要因として善根を多く積んで，菩提に心を起こし，それらによる諸々の善を極楽に生まれる要因として廻向して，そこに生まれようとする願をたてる等々のことをなしたならばそこに生まれるのだと説かれているから［我々はそのように修行せねばならない］。

教主［である無量寿仏］をはじめとする最上国の功徳を心になすなし方を要略すると，ツォンカパ師の『最上国開門』に，

「娑婆世界から西方に，百千万億の仏国をとおり過ぎると，希有な極楽とよばれる［仏国］がある。そ［の国］は大地が多くの宝によって飾られ，きわめて心地よく，手の掌のように平坦で，宝でもって成り立っている山以外は黒山など一切なく浄らかで［ある。］美しく気持ちよく清浄な［その］国の［周］辺は七種の宝の河，樹木，そして多羅宝樹の輪によってとりかこまれて，ちょうど，星が月［をとりかこんでいる］ようである[15]。金，銀，瑠璃と水晶，珊瑚，赤真珠に金剛石，これら七つの宝でできた樹木には望みのままの無数のきれいな飾りが掛けられている。樹木の根や幹や枝などは柔らかで触れると快よく，かぐわしい香りをもっている。香りを乗せた［風］が［その木を］揺らす時，耳に快よいこの上ない音が起こる[16]。浄らかな衆生たちの饒益の基として，心をとらえる多摩羅，沈香，条香，蛇心白檀香によって薫ぜられた諸々の河の流れが，たえなる音をたてて流れている[17]。広大な願力から来起した宝の蓮華で乗加した光明の端では，正法という蜜のご馳走をする変化身が所化の人である蜂を喜ばせている[18]。心の望みを残りなくかなえる資財である完全な富によって天地は満たされている。比べるものがないほどよく調えられた［それら］は金の大地の上の大洋のようだ[19]。すぐれた業

14) 浄全 p. 286, l. 24.
15)『最上国開門』(広本) TTP. Vol. 153, 68-1-4 ～ 68-1-7.
16) 同上，68-3-1 ～ 68-3-3.
17) 同上，68-3-8 ～ 68-4-1.
18) 同上，68-4-5 ～ 68-4-6.
19) 同上，68-5-3 ～ 68-5-4.

［の力］によって化生した浄らかな衆生は諸相随好によって身はきわめて美しく，多くの功徳によって心はよく説き導かれており，あらゆる状況に於て法悦の中に生活している。電光のごとく速かな，無障の神通によって多くの［仏］国を超えて勝者の御前に［行き，］きわめて広大な二種［の善］を乗加して再び自らの［仏］国に［もどり，］喜悦をもって遊戯する[20]。海なす智慧は［すべて］海なす衆生のためである。［そして］海なす精神力によって［何ごとにも］けっしてひるまない防備をかため，海なす勝者（仏）の前で［菩提］心を起こして，海なす聞法を求めてけっして満足することなく，教法を余すところなく求めることによく通達し，出世間の論説の心髄を理解し，教法の論説にけっして恐怖心をいだかず，常に衆生の解脱のために努力している。それが主たる導師の無量光仏，その最勝の牟尼の種姓として生まれた勝者の御子であり名高き勇者［それが］浄土の菩薩たちである[21]。千六百ヨージャナ（由旬）というきわめて高い，そして枝葉は八百ヨージャナの所まで垂れ下り幹の太さは五百ヨージャナでたくさんの宝によって飾られたその菩提樹の前には，美しい勝者であるあなた［無量寿仏がおられる。］光りと威光は，その先端がさだかでない［程ゆきわたり］，眷属［の数］や寿命［の数］は推し量ることが出来ない。［そんな風］にして衆生の救護のために住しておられる［あなた］に頂礼する。[22]」

と［説かれているその］ように念じ，

［次に］善根を積む［方法］は，

「すべて大地は」云々から「であれかし[23]」

という［句の偈文を唱えること］によって，［修法者の前の］大地や建物などを極楽の国土のように信じて，

「円満行をなすことによって衆生に尽きることのない吉祥を与えつつ」云々から「来仰なされるべし[24]」

という［ところまでを唱えて，仏を］招来した上で，［次のように観想せよ］

「自身の現前に蓮華と月［のマンダラ］をともなった宝の座［がある。そ］の上に，自身の大恩ある本師と無別な世尊救世無量光［仏があらわれる。その］御身の色は溶かした朱銀の山に億日の光彩をあわせたように赤く光明を放っている。面は

20）同上，69-2-4 ～ 69-2-6.
21）同上，69-4-7 ～ 69-5-3.
22）この部分は『最上国開門』現存テキストには対応する個所がない。
23）"thams cad du yang sa gzhi dag/gseg ma la sogs med pa dang/lag mthil ltar mnyam baiḍūrya'i /rang bzhin 'jam por gnas gyur cig/"（『入菩薩行』10-35）
24）『最上国開門』（広本）67-2-6 ～ 67-2-8, 70-5-3 ～ 70-5-7.

一つ，御手は二つ［その手は］禅定印［を結んだそ］の上に甘露で満たされた鉢をお持ちになっている。［三十二］相と［八十］随形好によって飾られつつ，頭には頂髻を具有し，御身はサフラン色の三法衣が美しくつつんでいる。十方に放たれた無垢の光明は十方の世界のすべてをひろく満たしている。金剛結跏趺座によって菩提樹の前に座しておられる［その無量寿仏］の右には観世音，そして左には勢至，等々の不可思議［なほど多くの］菩薩や比丘の僧伽によって取り囲まれて［仏は］住しておられるのである。」

と，住しておられる［姿］を鮮明に観想した上で，

「可能なかぎり」云々から「大いに廻向する[25]」

という［偈文によって，観想した仏に対して］七支の供養をささげる。

［次に菩提］心を起こして廻向する［方法］は，

「無上師であり教主，世尊であり，完全な正覚を得た尊敬さるべき者たる無量光如来に頂礼する。供養する。帰命する。」

と出来るだけ多くの回数請問した上で，［次のように唱えるのである］

「無上師と十方の諸仏菩薩と，特に，菩薩の比丘僧伽を眷属としてしたがえた救世無量光［仏］よ，護念したまえ。広大な虚空にも等しい［程多数の］衆生のすべてを無上の幸福に安んずるために，我はすみやかに完全な正覚を得た仏の位を得なければならない。そのために，極楽世界に往生を得て，救世無量光［仏］の［直接の］教授を受けさせたまえ。それ故に，すべての聖なる転生の三時と係っている善なる行ないのすべて，そして，変わることのない如来の勅言をもってお説きになった真理と法界の厳浄で不可思議なる力によって，こ［の転生］から私が死に移るやいなや次の転生［への道］を断って，極楽国の救世無量光［仏］の現前の蓮華の花芯の上の獅子［がささげ持つ］座への化生を得させたまえ。生まれるやいなやダラニや三昧などの功徳の無量のあつまりを得て，無上の教主無量光［仏］などの十方の仏のすべてから［直接の］教授を受けることの出来る可能性を見い出して，一瞬一瞬にすべての仏国へ障害なく［通りぬけて］入らせたまえ。」

と鮮明に観想しつつ，強い欣求をもって三度等唱えて，［菩提］心を起こしてすべての善根を極楽に生まれる因として廻向するのである。

［次に］願は，

『普賢行願讃』とツォンカパ師がお造りになった『極楽願文』を広く［全文を唱え

25) "ji snyed su dag phyogs bcu'i 'jig rten na/" にはじまる『普賢行願讃』冒頭の12偈を指すと思われる。七支の供養とは "phyag-'tshal-ba", "mchod-pa", "sdig-bshags", "rjes-su-yi-rang", "bskul-ba", "gsol-ba" を言う。

るか] あるいは略すなら,

「寿命が尽きるその時」云々から「衆生を導かせたまえ[26]」

という [ところまで] と

「その勝れた仏陀の位を」云々から「真理をもってこれらの願を速かに成就させたまえ[27]」

という [ところまでの] 諸 [句] を強い欣求をもって多くの回数唱えるのである。

それから, 自身の現前に眷属をともなった教主無量光 [仏] がまじかに住しておられると観想して, 自身の心臓部に識の本性として白色の「a」あるいは「hūṃ」もしくは豆つぶほどの光りの白いしずくを鮮明に念出し, 息を外に出す場合は頭頂から出し, 救世無量光 [仏] の心臓部に溶け込む, 息を内に入れる時は [仏の] 心臓部から出た [ものが] 自身の頭頂から心臓部へ入ってくる, というように百千回等なすのである。そのように瞑想することによって頭頂がこそばゆくなどするようになったら, 鼻の穴から入ってくる観想をなす。ひとくぎりの瞑想の末に現前の眷属をともなった無量光 [仏] がひとまとめになって自身に溶け込む。[そして] 自分自身が無量光 [仏] になったと観想する。

あるいは願文のあとに, 現前の無量光 [仏] を自身の頭頂へと招来した上で, 密伝のとおりに自身の識を自身の心臓部と頭頂の無量光 [仏] の心臓部との間に中央の脈管をとおして入れ込む, という観想をなして [無量光仏が] 自身に溶け込むのである。

最後に, 観想の対象をなくして広く [瞑想] して,

「すぐれた喜ばしきその勝者のマンダラに」云々から「諸衆生に多くの利益あるべし[28]」

という [偈文] をくりかえし唱えるのである。

すべての修行道をつうじて教主をはじめとする最上国のことを心に念じて, その国へ行きたいという欣求と不離にあるべきである。

という [以上の] この [書] は, 北部の辺地に生まれた sBrang btsun snyoms las pa Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po (チャンキャ) が『最上国開門』や『易行道[29]』などから要略して著述した。

この [功徳を] もって劣った衆生のすべてが浄土に安んずることにならんことを。

---

26)『最上国開門』(広本) TTP. Vol. 153, 71-1-8 ～ 71-2-2.
27) 同上, 71-5-6 ～ 72-1-1, 72-5-3 ～ 72-5-8.
28)『普賢行願讃』の第59偈と第60偈にあたる。
29) 大谷 No. 6226, 1Cang-skya, *bDe ba can gyi zhing du bgrod pa'i myur lam gSal bar byed pa'i sgron me zhes bya ba,* TTP. Vol. 162, 142-4-2 ～ 146-3-2.

文　　献

KHETSUN SANGPO
1978 *Biographical Dictionary of Tibet & Tibetan Buddhism* Vol. 4, Library of Tibetan Works & Archives.
小野田俊蔵
1979 「チベット撰述の浄土教系仏典」『仏教大学大学院研究紀要』7: 1–21。
1981 「ツォンカパ造『最上国開門』試訳」『仏教文化研究』，浄土宗教学院，27: 141–156。
宗川宗満
1931 「完全清浄極楽国土誓願」『今岡教授還暦記念論文集』大正大学浄土学研究会：643–670。

略　号

TTP.; Tibetan Tripitaka『影印北京版西蔵大蔵経』西蔵大蔵経研究会，1957。
浄全；「蔵和対訳無量寿経」『梵蔵和英合壁浄土三部経』浄土宗全書 23: 213–339。